

文化創造都市フォーラム 報告書

2016年9月21日（水）
於 もりおか町家物語館浜藤ホール

1. 基調講演 『文化創造都市・盛岡に向けて』

講師：佐々木雅幸氏（同支社大学教授・文化庁文化芸術創造都市振興室長）

2. パネルディスカッション『盛岡の文化芸術を考える』

パネラー：田口友善氏（シンガーソングライター、もりおか啄木・賢治青春館芸術監督）
長内努氏（彫刻家、もりおか町家物語館美術監督）
赤坂國彦氏（盛岡市市民部市民協働推進課課長）
木村敦子氏（アートディレクター、「てくり」編集者）

司 会：坂田裕一（特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター）

文化創造都市推進市民会議
特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター

< 基調講演 >

文化創造都市・盛岡に向けて（要約）

講師：佐々木雅幸氏（同志社大学教授・文化庁文化芸術創造都市振興室長）



ナントー文化による都市再生

初めて「創造都市」という言葉を聞いた人も多いと思うが、創造都市とは「市民1人1人が創造的（クリエイティブ）に働き、暮らし、活動する都市」のことである。今、この言葉が世界中で街づくりの1つの目標になってきている。

具体的な創造都市としてはヨーロッパにいろいろなモデルがある。例えばフランスのナントは、ロワール川の川沿いで造船業を中心に発展してきた街だが、1970年～80年代に造船業が衰退してきた。街の基幹作業が大きな経済の変動で衰退すると失業者が増え、財政危機に陥って衰退する。アメリカでも自動車産業の中心都市・デトロイトが倒産した例があり、同様に20世紀に栄えた産業都市、工業都市が世界各地で衰退してきた。

ナント市では、39歳のエロー氏が新しい市長になり、それまでと違う行政運営を始める。エロー氏は思い切って文化創造に街づくりの舵を切り、3つの目標を立てた。1つ目は市民の芸術創造活動を重視する。2つ目は芸術に親しむ多様な「場」を創造する。3つ目は基盤となる文化予算を増額する。エロー市長が引き抜いた文化局長がボナー氏で、その師匠に当たるジャック・ラング氏は大臣になった時にフランスの文化予算を2倍にした辣腕の方である。このよ

うに文化政策で国や都市や地域を再生する政治家、専門家がヨーロッパには出てきている。

ナントで印象的なのは倒産した造り酒屋やビスケット工場の跡をカフェやレストランにして、世界的なアーティストも参加する文化創造の場所に生まれ変わっていることである。この場所はリュウ・ユニークと言い、その名の通り、世界に1つしかない場所になっている。

さらに新しいタイプの音楽イベント、ラ・フォルジュルネ（熱狂の日々）を始めた。クラシック音楽に熱狂する日々。クラシック音楽は静かに教養ある人が聴くものというイメージを取り払い、子供から大人まで楽しめるタイプのクラシック音楽コンサートを新しく創り出した。音楽プロデューサーのルネ・マルタンは、子供から大人まで楽しめる音楽祭にする、公演時間を45分にする、チケット価格を低料金にするという3つの方針を立てた

正式な音楽ホールばかりでなく様々な場所を活用し、3歳～6歳まで、あるいは6歳～12歳までのシンフォニーなど多くのプログラムも用意した。これが評判を呼び、日本でも東京、金沢、新潟などでも行われている。こういう活動を通じて若い人たちの仕事生まれ、今やヨーロッパでは新しい文化創造産業で雇用を満たそうという積極的な方向に切り替えている。その最も象徴的なものが大きな造船所を再生した**アートセンター**で、有名な大道芸人の集団にも貸した。巨人、像、人形などが街中を練り歩いて熱狂を引き起こした。ロンドンオリンピック・パラリンピックでもこの集団が活躍したが、その世界的な流れをこの街が創り出した。なお、この街の文化予算は一般財政の13%を占めている。

C.ランドリーの創造都市政策論

イギリス人のランドリー氏は、都市の中に創造的問題解決を考える「創造の場 **creative milieu**」を創り出すことを提案した。いろいろなアイデアを持った人たちが討論すると、思いがけないアイデアが突然ひらめくことがある。それをセレンディピティと言うが、当初考えていたこととは違うもつと面白いことが次々と沸いてくる状態が **creative milieu** である。

creative milieu を街の中にたくさん創ることを1つの都市政策として系統的にやろうという創造都市が定着してきた。その背景として20世紀の工業経済が衰退し、21世紀には創造経済という新しい経済の流れが出てきた。これを都市政策の中に積極的に受け止める。この考え方はイギリス政府が最初に大々的に取り上げた。20年ほど前、ブレア首相の時代に文化省で芸術産業を認定し、積極的に街の中で広げる政策を取り上げた。その時に挙げたのが音楽、舞台芸術、映像、マルチメディア関連の新しい芸術などで、この **creative** 産業振興策をロ

ンドンが大々的に行った。

ロンドンオリンピックの成功は、スポーツの祭典に限らずクーベルタンが提唱した「スポーツと文化と教育の融合」という原点に戻った点にある。しかも、開催期間の1カ月間だけではなく前の大会が終わってからの4年間、集中的に文化プログラムをロンドン以外のイギリス全土を含めて行った。私どももこれから4年間、ロンドンの文化プログラムを東京オリンピックに向けて集中的に日本全国でできないか。それによって文化創造都市が日本中に広がらないかと考えている。

R.フロリダの創造階級論

アメリカを見るとピッツバーグとデトロイトは重工業の中心地であった。ピッツバーグ出身のリチャード・フロリダが物心ついたときは、現在の日本と同じで右肩下がりで失業者が増えていた。そこで彼はこれからの都市はどのようにしたら再生できるかを調べた。そして面白い結論に達する。アメリカではハイテク産業が伸びていたが、そこにはゲイと同性愛者が多いという面白い共通現象があった。ハイテク産業とどんな関係があるのか？

20世紀100年間のアメリカの職業変遷を見ると、農業者はどんどん減り、製造業者は右肩上がりではあるが頭打ちである。サービス業は1965年を境に製造業を抜いていく。このサービス業の中に創造産業が入っている。創造産業の従事者がどんどん増えてきており、アメリカでは直接の創造産業に関わる人、それを応援する人たちを合わせると約3割の就業者がいる。となれば、この人たちが集まる都市でなければ発展しない。職種は超創造的中核、つまりコンピュータ・数学、建築・エンジニア、そして芸術・エンターテイメントなどの職業、それを応援する専門的職種、これらを合わせてクリエイティブクラスと呼んだ。これがこれからの社会の発展のカギであると。特に彼は地域の発展をタレント（人材）、テクノロジー（技術）、そしてトレランス（寛容性・雅量）の3Tの要素で調べ、クリエイティブなタレント、ハイテクな技術者は寛容性が高い地域に集まっていることがわかった。

寛容性を示すのは何か。隣にゲイの人が住んでいてもOKだよ。ゲイの人たちは既成の考え方と反対の主張をする場合がある。古い考え方の人たちはそれを排除しようとする。今はクリエイティブなどどんなアイデアも、性同一障害に悩んでいる人たちも自由に暮らせる形の街づくりが発展している。そのための拠点が大学で、クリエイティブな人材を育て、ハイテク産業を育てる。その代表はサンフランシスコで、ゲイやホームレスにも寛容な都市でたくさんのアーティストが住んでいる。シリコンバレーは車で1時間余り、ハイテク産業とサンフランシスコが一緒になってものをつくっている。そこから新しいテクノ

ロジーと生活を変えるような文化が生まれている。

ユネスコによる創造都市ネットワークの提唱



2004 年からはユネスコが創造都市ネットワークを世界に呼びかけている。その基本的な考え方は文化の多様性で、世界には異なる多くの言語、宗教があるが、その人々が共に仲良く暮らすためには違いを認め合うことが大事である。このネットワークは7つのジャンルで都市の申請を受け付けており、現在、116の都市が加盟している。本部がパリにあるのでヨーロッパの国々の創造都市が多い。東アジアでも日本、中国、韓国は積極的にユネスコの認定を受けており、日本は7都市、中国は8都市、韓国は6都市

が世界のネットワークの大事な役割を果たしている。

UNCTAD(国連貿易開発会議)は主に途上国の貿易の振興を担当しており、創造経済レポートを2008年、2010年、2013年にも出し、先進国のみならず世界の創造経済、創造都市が注目されるようになっている。

20世紀の工業形態は大量生産、大量消費をベースに大企業が集まる都市が発展した。しかし、創造経済が主流となる21世紀から22世紀にかけては必ずしも大企業を中心ではない。社会の変化にフレキシブルにトライして新しいアイデアを製品やものづくりに生かし、あるいは文化的消費が伸びていくとしたら違いのわかる消費者に対して届ける。そういうネットワークが大事になってくる。都市の形は産業都市から創造都市に変わる。これまで日本の地域開発や地方の発展は工業都市をつくり、企業を誘致することだった。しかし、企業は海外へ行ってしまう。そうであれば、クリエイティブなアイデアやクリエイティブなネットワークを持っている人たちが集まらないと発展しない。これはフロリダもランドリーも言っており、創造都市政策に切り替えるとなると、文化芸術は都市の競争力の大きな要素になる。文化芸術に予算を投じない都市は完全に競争から取り残されるだろう。

ユネスコ音楽都市・ボローニャ

イタリアのボローニャがまさにものづくりの新しい方向を示している。ユネスコのネットワークにも入り、音楽都市として活動しているが、大企業はない。

すべてが中小企業、自動車産業でも大量生産ではなく高級なスーパーカーを作る。街の中心に 900 年以上の歴史があり、大きな芸術学部を持つ大学がある。多くの劇場や映画館もあり、300 年以上の歴史のあるオペラハウスもある。その向かい側に大学の本部があり、市役所の隣にあった株式取引場を図書館に変えた。

オペラはオペラハウスの中で演じられるだけではない。オペラは仕事という意味で、一人前の職人が自分のアイディアで自分の手を使ってほかにはないものを創ること、創造的な仕事をするというのがオペラの本質である。合わせてたくさん協同組合がある。オペラをみんなと一緒にやるという言葉が **Cooperativa**（社会協同組合）で、みんなが楽しく仕事をするために作った組織である。ボローニャには新しいものが出てきて保育所や老人ホーム、障害者施設も **Cooperativa** となり、普通なら社会の端に追いやられる人たちに光を当てて一緒に仕事をしている。ホームレスの組合もある。経済的支援もするが心を変えるというので、演劇を行っている。この劇団は山形大学と連携して山形でも公演している。ボローニャはユネスコのネットワークの中心の 1 つである。

内発創造都市・金沢の挑戦

私は 2000 年まで 15 年間金沢において、金沢市長や金沢経済同友会の方々と一緒に創造都市会議を始めた。2004 年には横浜市、神戸市が相次いで創造都市に関する宣言を行い、札幌市や京都も行う流れが出てきて 2008 年、2009 年と名古屋、神戸、金沢がユネスコのネットワークに入り、2014 年末になるとユネスコ都市が 7 つになった。

その 1 つ、金沢市は人口約 45 万で決して巨大都市ではない。伝統的な街並みや職人工房を大事にしている点はボローニャと同じで、古い街並みを保存している盛岡市もこの流れと共通している。経済の発展方向は内発的で、大企業を外部から誘致するのではなく地元の企業のネットワークを生かして文化的なものづくりをしている。さらに近年は保存から創造へという新しい機能を取り入れて文字通り創造都市を重視している。伝統的な景観を保存する条例をつくり、それも多種類あってきめ細やかである。また、金沢には 23 の伝統工芸が残っており、これを発展させて再び職人的要素、文化的なものづくりに新しい生き方を求めている。街の中の紡績工場の倉庫を再生させて**市民芸術村**をつくり、市民が 24 時間自由に使える場所になっている。新しいアイディアは、夜中にひらめくこともある。真夜中に使える練習場がなかったら舞台創造や芸術活動はできない。日本にある文化施設の場所はほとんど文化消費の場所で、昼間人々が鑑賞する施設である。しかし、一番大事なのは文化を創ること、創り込む場所である。ここは日本で初めて 24 時間使える施設になっている。そのためにボラ

ンティアの市民が自分たちで使用細則を決めて運営している。この運営方式も含めてグッドデザイン大賞を受賞している。

2004年には都心に現代アートに絞り込んだ**金沢 21 世紀美術館**を造った。それまでの金沢は伝統芸能、伝統工芸の街だった。しかし、21世紀はまさに創造産業であり、新しい世界の芸術の照準は子供たちにもわかることと考え、子供たちが手で触って体験できる美術館を造ることになった。しかし、当時は市民の意見が真っ二つに分かれた。人間国宝の作品を買っておけば価値は変わらない。税金を使って現代アート作品を買っても50年したらガラクタになり価値がなくなるのではないかという反対の声があった。この時、市長は「価値が決まらない、定まらないものこそ美術館には必要だ」と答えた。そこに新しい創造の息吹があり、子供たちがそれに触れる。伝統は創造の繰り返しであり、現在伝統として残っているのは、必ずその当時は最先端、アバンギャルドであった。その繰り返しを怠ると街は博物館になってしまうと、市長はこの論争を受けて立った。

金沢 21 世紀美術館は創造都市金沢の1つのシンボルになっており、周りにたくさん美術館や工房があり、街の中に美術品がある景観が生まれる。これまで経済が栄えたら文化が栄えると言ってきたが、実は反対だ。21世紀は文化に投資を怠ったら経済は衰退するという「文化資本」の考え方を入れ、文化こそが実になる資本なのである。金沢は2009年にクラフトの分野で世界最初の創造都市に認定された。

創造都市から創造農村への広がり

金沢の後を追いかけて横浜がクリエイティブシティ・ヨコハマの構想をスタートさせた。横浜はナントと同じく造船業が衰退した港であり、空いている倉庫や銀行を**アートセンター**に変えた。世界からアーティストが集まり、**アーティスト・イン・レジデンス**という創造拠点を中心に交流しながら作品を作る。衰退した街には学生たちが入ってアート作品を展開している。現在、横浜は東アジア文化都市という事業で次のステップに向かっている。

文化庁は2007年度から毎年4、5カ所の文化創造都市を表彰している。それらの都市を中心にネットワークをつくっているが、創造都市という言葉が広がっていくと大都市だけでなく中規模都市や農村でもやってみたいというところが出てきた。例えば、木曽の町長は農村に適用して「創造農村」ができるのではないかと言われ、今、そのワークショップが始まっている。この創造農村の最先端になっているのは、徳島県の神山町である。ここではアーティスト・イン・レジデンスをやりながらICTのワーカーが集まっており、消費者庁の徳島県への誘致もこの神山町が中心になっている。

私は『創造農村』を出版するときに、宮沢賢治は農業をしながら芸術活動をする「半農半芸」を言っていたと坂田裕一さんから教えていただいた。恐らく創造農村はそれの実態化であろう。賢治はイギリス人のジョン・ラスキンの考え方に感銘を受け、羅須地人協会をつくった。ラスキンはまさに文化経済を世界で最初に提唱した人で、ベネチアの街並みの保存も提唱している。

伝統芸能や伝統工芸を現代に生かす。そして農村においても都市においても創造的な要素に行政が積極的に支援していく。その時、創造的な人材が世界中から集まってくる。今、移住という言葉が注目されているが、移住に成功している所は寛容性がある。その地域に新しいアイデアを持った人など、これまでと違う暮らしぶりをする人たちを排除しないで積極的に受け止める可能性の高い所にクリエイティブな人材が集まる。

日本でも創造都市ネットワークを3年前に設立し、現在82の自治体が加入している。東北地方は震災の影響もあり出遅れているが、東北6県の中で岩手県だけが入っていない。ぜひ、岩手県、盛岡市やNPO関係の方にもネットワークに入っていただきたい。リオデジャネイロオリンピックも終わり、この秋をキックオフに文化プログラムを日本全国で大々的に準備している。東京のみならず日本全国で、文化で地域を再生することを文化庁で全面的にやろうと。その受け皿を地域で進めれば創造都市ネットワークになる。ネットワークに加盟している所には優先的に文化庁は応援するという考え方をしているので、入ったら入っただけのことはあるのでぜひ考えていただきたい。

<パネルディスカッション>

盛岡の文化芸術を考える (要約)



◆パネラー

田口友善氏 (シンガーソングライター、もりおか啄木・賢治青春館芸術監督)
長内 努氏 (彫刻家、もりおか町家物語館美術監督)
赤坂國彦氏 (盛岡市市民部市民協働推進課課長、文化国際室長)
木村敦子氏 (アートディレクター、『てくり』編集者)

◆司会

坂田裕一 (特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長)

坂田 本日のパネルディスカッションはインタビュー・ダイアログという、1つ1つの質問にパネラーに回答していただく形で進めます。まずパネラーの方に自己紹介していただきますが、次の点について1分以内でお答えください。1、文化芸術関係で今、どんな活動をしているか。2、盛岡・岩手の文化芸術状況について一番懸念していることは何か。では、赤坂さんから。

赤坂 私はどちらかというとスポーツ系で文化には疎く、個人的にはたまに絵画や演劇鑑賞をする程度です。2の質問では、岩手の芸術文化を中心になって担っている方々が高齢化していることを懸念しています。

長内 彫刻と演劇の舞台美術を中心に活動しています。もりおか町家物語館

のほかにいわてアートサポートセンターにも関わっており、今年で43年になる盛岡彫刻シンポジウムにも関わっています。50年近く前に世界中で彫刻シンポジウムが流行り、彫刻の力によるまちづくりという流れでスタートしたが、ほとんどの国がやめてしまった中で、岩手県で唯一、日本でも一番長いシンポジウムです。2について、私は岩手大学の特設美術科を卒業し、岩手で美術活動をしているが、今年度から岩手大学の美術課程が大きく形を変えてしまった。今までのように20人、30人というアーティストを養成することがなくなった中で、岩手は文化の担い手たちをどう育てていくのか。盛岡は県庁所在地なのでアーティストの卵たちが集まってきたが、これから盛岡はどういうことをしながら若い人たちを育てていくのか心配です。

木村 普段はグラフィックデザインの仕事をしており、もう一步踏み込んで、関係性を創り上げるような仕事もしています。その傍ら『てくり』という地域のミニコミ誌を年2回発行し、11年目になります。合間に作っている別冊は岩手の漆、岩手のホームスパンなど手仕事系が多いですね。広く街の「人」にスポットを当てたミニコミ誌を作っていきたいと思っています。懸念することは、私も岩手大学の学部編成が変わることです。『てくり』の取材でもいろんな方にお話を伺うのですが、岩手大学の歴史が市民活動に深く関わっていることを痛感します。美術系、研究職のちょっと変わった、と申しますか「個性的」な若者の受け皿がどうなってしまうのか心配しています。

田口 市役所を4年半前に卒業しましたが、役所にいる間はずっと歌う公務員と肩書をつけられて窮屈だったので、早くただの歌い手になりたいと思っていました。今、プラザおでつとともりおか啄木・賢治青春館の芸術監督として、自主事業、主に青春館の企画展やおでつての芸能館、最近盛岡弁予備校などを企画実施しています。地域の文化で関心があるのは方言で、もっと盛岡弁を広げていきたい。懸念していることは、これだけ大きい震災を体験して芸術文化に影響がなければいいなと思う。2つの施設を運営するに当たり、どちらも老朽化して設備の修繕が必要なのに市で予算をつけてくれなくて使い勝手が悪い。うちに限らずいろんな施設が同様の悩みを抱えているのではないかと思います。

1、盛岡の文化芸術の土壌は豊かで活動は充実しているか

坂田 では、インタビュー・ダイアログを始めます。ここに6つの質問を用意していますが、ここでは5つの質問を解決。4つ目は会場の皆さんから3問終わった段階で質問をいただきますので考えておいてください。この質問に4名の方は○か×でお答え願います。△はありません。

スライドに映し出された6つの質問

質 問	赤坂	長内	木村	田口
盛岡の文化芸術の土壌は豊かで活動は充実している。	○	×	○	○
啄木や賢治など先人の文化を今に伝える活動は充実している。	○	○	○	○
盛岡には新しい表現を育てようとする風土がない。	×	×	○	○
観客からの質問				
文化芸術は街づくり、地域づくりの核になる。	○	○	○	○
盛岡に文化芸術振興の指針や計画は必要か。	○	×	○	×

坂田 以上の結果です。まず3つの回答について理由を聞きます。1の問いに○をつけた木村さん、どうしてですか。

木村 「土壌は豊か」という前半は文句なく○で、「充実している」かどうかはわからないけど、どちらかと言えば○かなと。私は福島以外の東北6県に住んだことがあります。盛岡はどこの県庁所在地よりも演劇あり音楽ありアートありと土壌は豊かだとは思いますが、でも、それを生かす活動が充実しているとは言い切れないような。

田口 ○にしましたが、金沢のお話を聞くととんでもないなと（笑）。具体的に他都市と比較したわけではないが、街の中で様々行われている発表会、特に盛岡は芸事、お稽古事が盛んで充実しているし、人口の裾野は私が知っている限りの他と比べると広いと思って○にしました。

赤坂 盛岡のさんさ踊りなども伝統芸能のイベントに出して若い人たちへつながっている。演劇も盛岡劇場を中心に様々な活動が行われている。クラフトも南部鉄器や古代型染など様々な工芸も続いているし、食文化は盛岡三大麺などもある。ナントではビスケット工場を文化創造の場にしたという紹介があったが、今日の会場（もりおか町家物語館）も元酒蔵であり、もりおか啄木・賢治青春館も旧銀行を改修してそういう場になっているし、私としては比較的土壌は豊かで活動も充実していると感じます。



坂田 それに対して長内さんは×ですね。



長内 私も○にしようかと思ったがみんな同じでもと（笑）。前半の土壌が豊かというのはそうかなと思う。大学の同級生は北海道から九州まで各地から来ていたが、盛岡は暮らしやすいとそのまま住み着いた人も多い。先ほど佐々木先生は寛容性と言われましたが、その辺りが盛岡のアーティストの定着率を上げて文化度を上げる1つの理由かなと思いきや○なんです、後半の活動が充実しているかといわれると、私は盛岡市と岩手県の芸術祭にも関わっていますが、確かに音楽や演劇、美術に関わっている人は多い。しかし、どちらも非常に高齢化が激しくて出品者も若手がどんどん減ってきている。なぜかという、若い人たちが地元を向けない傾向にある。それを考えると×です。

坂田 岩手県では若者文化祭や盛岡では石垣ミュージックフェスティバルもあり、若者が中心になっているところもありますが、逆に従来型の文化の高齢化が1つの原因だと考えるんですか。

長内 若者に目を向けてイベントをやろうというのは非常にいいと思う反面、若者は1人で成長していくわけではない。いろんな世代、いろんなジャンルの人たちとの交流が若い人を育てていくのではないかと思ったとき、若者だけに光を当てていいのだろうかという思いは少しあります。

田口 他都市に比べて市民が使いやすい施設が公にも民間にもあることを褒めたい。小ギャラリーはこの規模の街にしてはたくさんあって利用率も高い。コンサートや演劇も盛岡のタウンホール、おでつホール、風のスタジオなど100人～300人の使いやすい施設を持っているのは大きいと思う。

坂田 おでつホールのギャラリーは人気ですが、それ以外は使う人が減っている状況らしいですが。

長内 かつては市内のギャラリーなども2年先までいっぱいというほど個展が目白押しでしたが、最近は常設展ばかりで喫茶店など小さい空間などに偏りが出てきているのも感じるし、昔はそういう空間がなくても演劇をやりたいとなるとギャラリーや民家で公演したり、工夫しながら空間づくりをしていたと思う。今はその空間があるので、そこにこじんまりと収まっているが、だからといって増えたということでもない気がします。

2、先人の文化を今に伝えているか

坂田 2の質問については全員○ですね。

赤坂 市役所にあるパンフレットを持ってきましたが、先人記念館、原敬記念館、盛岡てがみ館、石川啄木記念館、もりおか啄木・賢治青春館などそれぞれ企画展を行って伝える活動を行っている。少し前はブランド推進室や先人と文化振興プロジェクトで立原道造の「盛岡ノート」や啄木の「悲しき玩具」を復刻したり、今も啄木没後100年記念事業などをやったり、そのほか学校で先人教育もあり充実していると思います。



木村 すみません、先人記念館の話が出てきたのでこれは言わねばと(笑)。学芸員さんはすごく頑張っているいろいろな企画展をやっていますが、それを全然アーカイブ化していなくて、実にもったいないと感じています。たとえば調べ物に行くと展示リストの簡素な印刷物くらいしかなくて、研究成果を冊子などにまとめないのかと聞くと、そのお金がありません、と。地道なデータにこそ様々な発見のヒントがあるはずなのに、地道にやっておられる方々の努力が全然報われていないと思います。なんとかして

あげてほしい。

長内 私は「啄木・賢治など」の「など」にちょっと引っ掛かりました。啄木・賢治は一生懸命だけれどもそれ以外の先人たちはちゃんと紹介できているのかと。確かに記念館は頑張っているが、本当に市民、県民が情報をきちっと得られたり発信したりできるかを考えると、やはり啄木・賢治に頼り過ぎている部分がある気がします。

田口 盛岡市民で思うことは、観光ボランティアの人たちも優れた先人を輩出したことを誇りに思い、観光客に説明しているのを聞いているといいなと思います。

坂田 賢治はそうだけど、啄木はもう少し足りないという感じはしませんか。

田口 啄木・賢治青春館でも賢治さんの企画が多く、啄木さんは半分以下かもしれない。集客力をみてなのか、どうしても賢治のほうが倍以上はあり、ついそうなりますが、啄木についても研究している方たちが非常に熱心にいろいろな機会をとらえて活動している印象を持っています。

坂田 ちなみに来年の2月、3月に浜藤ホールと風のスタジオで啄木と賢治の中学校時代という芝居をやります。2月はロミオとジュリエット、石川家と堀合家の争いで、男子学生と女子学生が好き合って両家がバトルを繰り広げる。3月は賢治の家庭の問題。中学時代、岩手医大の看護婦さんに恋をする賢治と

親との確執という芝居で、両方とも喜劇で花巻ではなかなかできないことを盛岡でやるということになります（笑）。

田口 同じ時期の1月～3月、啄木・賢治青春館で「あなた賢治派？ 私啄木派？」をやります。2人を比較してみるといろんなことがわかる。その楽しい糸口にしたいと思います。

3、盛岡には新しい表現を育てようとする風土はあるか

坂田 次に3番目の質問で風土があると答えたのは赤坂さんと長内さん、ないと答えたのは木村さんと田口さんです。

木村 盛岡は転勤族も多いし、いろんな方が来ている街です。近江商人がつくった街でもあるので、新しいものを受け入れる「新しもの好き」というのはあるんじゃないでしょうか。それはいいですが、「育てよう」というのは引っ掛かるんですね。みんな好き勝手にやっている感じ。うちはうちだからという自由な気風かもしれませんが。

田口 方言で盛岡人の精神性を一言で言うと「おやれんせ」。新しいものに関して盛岡の人は非常に冷ややかに周りで見ている。流行り出すとそれに飛びついていく。それも外部から評価されると遅ればせながら後追いでいく。啄木・賢治だって最初はそうではなかった。若い時、商店街に行くと2人の悪口合戦みたいになっていました。材木町だって賢治さんの様々な変人ぶりは、などということばかり話題になって。ところが世界的に評価されると一転して「いはと一ぶアベニュー材木町」という名前を付けている。そうは言えども新しい表現が全くないわけではなく、旧来の盛岡の人は「おやれんせ」精神があるかもしれないが、盛岡はほかから来た人たちが街をかき回しているところがある。盛岡生まれの人でも一旦東京に出て、離れて盛岡を眺め直して一緒に応援しようということはあると思うが、総じて冷ややかだと思えます。

坂田 風土はあると答えた長内さん、いかがですか。

長内 私は「おやれんせ」をプラスで考えました。どうぞ勝手にやってくださいというのは、ある意味で新しいことを叩き潰さない。寛容性がある土地柄と考えると積極的に育てているとは言わないかもしれないが、新しいことをやろうという芽を出させるような土壌はあるのではないか。ちょっと変わったことをしても頭を叩いてなくしてしまわない部分を私はプラス面でとらえました。

坂田 根は田口さんと一緒かもしれませんが。赤坂さんはいかがですか。

赤坂 この前、石垣ミュージックフェスティバルを見に行きましたが、今までにない新しい表現で街なかに元気が、人があふれているのを目の当たりにして、育てる風土はないと言い切れないと。これは盛岡城開城100周年を記念して盛岡の街なかに賑わいをつくらうと始めましたが、行政と民間が一緒になっ

て実施してきた結果、ああいう賑わいになって今後もっと大きくなる可能性をすごく感じてきた。若い人だけでなく年配の人も一緒に楽しんでいるのを見たとき、これからもっともっと化けるイベントになるなと感じました。

田口　私も去年、バンドを組んで出たが、石垣は驚いた。3年くらいで多分終わるだろうと思っていたのに、それが10回も続いたというんだから盛岡も捨てたもんじゃないなと。チェンジウェイブの黒沼さんがいたからここまで来たと思いますが、彼のような人材は貴重で、街の文化は人がつくっているという見本だと思います。

坂田　木村さん、『てくり』を出版したとき、仲間の反応はいかがでしたか。

木村　ほぼ無視でした（笑）、感想らしい感想を聞いた覚えが無いというか。もちろん、応援してくださる方もいましたけど、諸手をあげて「いいね！」という感じではなかったかな。創刊前にこういうことをやろうと思うと話しても、「へえ〜」とか「大丈夫？」という感じ（笑）。余談ですが、市役所にも何か予算をつけてもらえないかと相談に行ったのですが、無しの礫でした。まあ無名の主婦の集まりだったので、当然といえば当然ですけど。最近では「モリブロ」というイベントを震災以後5年やっていますが、これも「6月以降のイベントでないと予算をつけられない」と、断られました。予算が議会を通った後でないと補助金ってつけてもらえないので。こういう事例からも感じるように、「育てよう」という風土があるかと言えば.....やっぱり微妙な気がします。

田口　『てくり』を評価する観光客は多いですよ。あれを見て盛岡に行きたいという人もいます。

坂田　盛岡の文化芸術で足りないと思うものを一言ずつお聞きします。

長内　一番に思い浮かんだのは市の予算です。文化芸術にかける予算が年々減らされてきているなあと。私に関わっている盛岡彫刻シンポジウムもわずかでも市から予算をいただいて継続してきましたが、それも担当部署が変わっていく中で減ってきている。市の芸術祭もどんどん減っている。出品者数も減ってきてはいますが、県の芸術祭も市の芸術祭も各部門が大変だと悩みながら運営している状況です。

木村　盛岡市の文化予算は一体何%だろうと常々疑問に思っています。

田口　教育委員会が所管する芸術文化には割と手厚いが、そうではないサブカルチャーのようなものにも目を向けてほしい。

坂田　要するに演劇、クラシック音楽、美術には予算が導入されるが、ロックなどの文化活動には税金が投入されないと。

田口　最近、岩手県が若者文化、様々なサブカルチャーを集めてバックアップしているのは良くて、盛岡市も一緒になってやれたらいいなと思います。

坂田　お金以外で足りないものは（笑）。

赤坂 盛岡彫刻シンポジウムと盛岡芸術祭の予算が少なくなっているというお話でしたが、少ないながら同じ金額を確保して予算をつけています。芸術祭に新しい芸術分野がなかなか参加してこない。もし入ってくるのであればそこに予算がつくと思います。市の予算はどの程度かという、施設関係も含めると10億くらいになり、盛岡の予算は1千億なので1%ぐらいは入っているのではないかと思います。



坂田 水戸芸術館が1%ですね。予算のことで言えば、行政の公的資金をどう文化芸術団体に支援していくかは、客観性を持った組織がないと難しいなと思うことはあります。

会場からの質問—盛岡は文化芸術活動をしている人間が食べていけるか

坂田 4番目の質問は会場からお受けします。○×で答えられる質問を提案していただきたいと思います。

会場 歴史都市と創造都市があり、文化景観保全を行う都市もあるとのことでしたが、盛岡市は創造都市を目指すと思った。創造都市はクリエイティブな人を集めるので、新しいものに対しては「おやれんせん」という盛岡人の気質があるということで、古いものとの摩擦があると思う。人口増加を目的として文化を流行らせるのか、観光産業を盛り上げるためにやるのか。人口増加なら○、観光産業なら×をお願いします。

坂田 この質問は5番目の質問と絡むので保留にさせていただきます。ほかにありますか。

会場 盛岡は文化芸術活動をしている人間が食べていける土壤があるかをお聞きしたい。

坂田 では、土壤があると思う人は○、ないと考える人は×をお願いします。
(赤坂× 長内○ 木村× 田口×)

長内 現実に私は食べています(笑)。もと高校の美術教員でいい給料をもらっていたが、いろいろやりたいことがあって途中で辞めました。収入はなくなったが、何かしら演劇や美術などいろんなことを生かした些細な仕事がそれなりに繋がっているのかなど。それをちょこちょこ渡り歩いて今、こうして現実に食べているので○にしました。

赤坂 それで十分に食えるかとなればなかなか難しいかなど。半農半芸ではないが、何かしら仕事をしながらというのが多いのではないか。それだけで食べているというのは余り聞いたことはないですね。

田口 活動のやり方次第で、食えるも食えないもあるだろうと思う。実際に

盛岡の中で食べている人たちも周りにいますが、数としてはやはり少ない。都市の規模も影響していると思うが、大きいからといって食えるかという、それもやり方次第だと思います。

木村 私も食べている端くれではありますが、注文があってそれを受けてこなせるからお金になる。注文がなくてもやるのがアートなので、それで食べていけるのかという、それは本当に一握りの人だと思う。注文をこなす職人仕事で食べている人はいます。専業でやっている方は少なく、皆さん二足のわらじでバイトをしている人も多い。演劇関係などは皆無ですよ。バレエなども教室を開いて教師として収入を得ることはできるけど、ダンサーとして食べている人はいないのではないかと思います。

坂田 そうですね。カルチャー教室の先生としては食べていけても、表現家として食べていく方は非常に少ないのではないかと。特に舞台芸術ではほぼないのではないかと思いますね。

長内 私も彫刻では×でした。



4、文化芸術は街づくり・地域づくりの核になるか

坂田 先ほど会場からの意見もありましたが、全員が○ですね。

木村 ボローニャの話はネットで前に拝見していて、そのとおりだと思います。南部鉄器あり、漆芸あり、岩手は工芸で食べていけるような土壌があるにはあったが、それが近代化に伴って衰退していった。昔ながらの「ものづくり」にこそ大量消費の時代から脱却していくためのヒントがあるというか、今だか

らこそ目を向けるべきではないかと思っています。そしてまずは、観光客ではなく住んでいる人が豊かにならないと話にならないわけですよ。住んでいて楽しい街に観光客がやってくるので。「人口を増やす」という目的のためになにかやるのではなく、魅力ある街だから住みたくなる、そして結果的に定住人口が増える、というのが正しいと思うんです。まずは今いる人たちが住んでいて楽しくなるようなお金の使い方や仕組みをつくっていくべきではないでしょうか。

坂田 観光の語源は、光を観る。光とは文化、国の文化を観ることだと中国の言葉にあります。文化が人を集めるための大きな役割を果たしていくとは思いますが。

田口 昔から盛岡のモデルは金沢だと思っていたが、盛岡はまだまだそうっていない。しかし、潜在的な魅力、可能性を秘めたものがたくさん素材としてある。それが余りにもいろんな分野にわたっていて、例えば盛岡のブランド推進計画を立てたときのキャッチフレーズが「もりおか暮らし物語」でした。それを継続して丁寧に行っていくと先があると思うが、内向き過ぎて外に向けた情報発信力が弱かった。暮らし物語の中で特化させて光を当てて、プッシュして育てていく取り組みをしていけたら地域づくりの核になると思います。

坂田 暮らしの中にいっぱいいいものがある。それは普段みんな認めていることだと思うが、それを磨き上げて発信するところをもっと頑張っていけないと、という気はします。

田口 鶴岡が食文化でいけるなら盛岡は三大麺でも（笑）。麺に特化してユネスコに申請するとか。

坂田 暮らし文化で盛岡が創造都市になるのも1つの話かもしれないですね。

長内 アートで街づくりをしているところを何か所か見たんですが、外から持ち込んできたアーティストたちが街を少し変えて行って、だんだん住んでいる人たちの意識が変わっていった事例を幾つも目にしました。アートが街づくりに対していろんな力を持っているのではないかと最近すごく感じています。

赤坂 先ほども言ったとおり材木町の通りや旧九十九銀行を生かした啄木・賢治青春館など、啄木や賢治を生かした街づくりも行っているし、新しい文化としての石垣ミュージックフェスティバルなどは地域づくりそのものだし、あるいは盛岡さんさ踊りも小学生から地域まで取り組んでずっと続けられてきているので、やはり街づくりの核になっていると思います。

5、盛岡に文化芸術振興の指針や計画は必要か

坂田 今まで盛岡市でなかった文化芸術振興の指針や計画を作ろうという動きがあります。本当に必要かどうかという質問です。○が2つ、×が2つと意

見が分かれました。○の木村さん、どうですか。

木村 実は「諸刃の刃」だと思っています。下手な指針ができてしまうと、それ以外のことをやろうと思うと全部ダメになってしまう危険性もあると思うんですよね。でも目標がないと予算も組めない。指針を作ることで文化に目を向けていただけるのであれば作ったほうがいいのではないかな、と。どんな指針にするかは、有識者会議という形だけの会議で決めるのではない、ちゃんとしたものができるればいいと思います。密室ではない、かといって船頭が多くて船が山に登らないような.....むずかしいかな。

田口 ×なのは長いこと役所にいた反省も踏まえてで、役所のこの手の計画は総花的にせざるを得ない。何かに特化して押し出していくことが今盛岡に求められていると思う。従来のような計画であればいい。指針や計画を作ればそれでいいのか？ 計画作りの中から新たな動き、エネルギーが生み出されるような、どういう人たちがどうしたいのかをはっきりと。役所の担当者に期待したいのは、自分たちに都合のいい人たちだけの意見を聞かずに、役所が不得意な人も入れて喧々諤々やらないとそういうエネルギーが生まれてこないのではないか。私の経験からしても、商店街の計画作成でも一番ケンカしたり意見が合わなかったのを乗り越え、ならやってみようじゃないかとムキになったところがその後で良かったと思う。作業の中でそういうエネルギーを生み出してほしい。

坂田 現状追認型の計画を作るのではなく、将来どうあるべきかをきちんと議論した実効性のある計画だったらいいということですね。そういう希望を持っているんですね。長内さんはもう1つの×です。

長内 私も似ているといえば似ているんですが、質問を見た時に今まで何もなかったということに、逆に驚きました。何もなくてこういう状況なら下手なものを作らなくてもいいのかなという思いでとりあえず×を出したが、気持ちとすればいい指針、計画であればしっかりと作ってもらいたいし、文化創造都市にぜひなってほしいという思いは強いです。

赤坂 盛岡市では現在、文化振興ビジョンという形で基本的な方向性や重点的な取り組みを今年度中に作成した上で、文化振興計画を将来的にどういうところにと年度計画を立てながら作っていきたいとは思っています。ほかの都市と同じように盛岡市も予算が増えない。福祉などにかかる予算が年々増大する中で文化にかかる予算をどうやって確保していくか。その裏付けとしてこういう指針と計画が必要だと思っています。計画を立てればマネジメントしてプランを立てながら効果を測定したりしながら進めていかなければならないし、設備も見直していかなければならない。盛岡は30万都市で大きい4つの文化会館があり、10年くらいの中でお金がかかっているのは事実です。逆に言えばそ

れがあるお蔭で市民の芸術発表の場が増えているとも思っているのです、そこは強みと認識しながら指針と計画に取り組んでいきたいと思えます。

坂田 盛岡市は文化創造都市になったほうが良いと思う方○、いない人は×をどうぞ。

(赤坂○ 長内○ 木村○ 田口○)

皆さんそういう意向ですので、盛岡市も文化創造都市のネットワークに加盟して各都市と一緒にやっていければいいなと思えます。

最後に今日のまとめとして盛岡の文化芸術に期待することを3つの視点で述べていただきます。1、文化芸術関係者に期待すること。2、国・県の文化行政に期待すること。3、市民や企業、地域へ期待すること。以上です。

田口 どれも同じことで、人が創るものなので人を育てていくというか、これを契機にいろんな人たちが動きやすくなるような人材を育てることだと思えます。特に役所も関心のある人がそういうポジションにつく必要性があると思え、その方はそれなりの経験や個人的な思いも含めて必要だと思う。演劇の街にしてもよくここまで来たなと思う。それは職員が単に仕事を仕事としてやっているのではなく、自分の暮らしとしてどうあったらいいかという思いが強かったし、反発も乗り越えてきた人がいたからここまで来たと思うので、人を育てていくことをどの分野にもお願いしたい。

木村 期待、希望というのがパッと出てこないのは何なのかなと思うと、行政にはあまり期待していないかも(笑)。でもすべて適材適所で、興味のある方が担当になると地味な活動にも目を向けてくれたりするんですよ。私たちが「まちの編集室」を結成するときも、県の女性職員の方が「市民団体になってくれたら仕事をお願いできるんだけど」と言ってくれたことがあり、そういう誘導、適切な助言をしてくれる人がいてほしい。そういう方たちとうまく出会える仕組みがあるといいですね。そして若い人たちにその門戸を広げることでしょうか。小さいながらも新しいギャラリーも出てきており、アート界限も転換期だと思います。次世代につなぐ、ということがこれから50年の課題だと思うので、これからどうなるのか見守って行きたいですね。

長内 私も若い人を育てていくことが一番大事なことだと思います。大学で若い人と接していると、インターネットで瞬時に世界の情報が入ってくる。ぜひとも若い人たちに地域だとか自分の足元に興味を持ってほしいと、アーティストに対して期待するところです。行政に対しては仕事としてというのはもちろんあると思うが、個人として理想をもってやっていただけると…そういう言葉が周りに影響を及ぼしていくのではと思う。岩手や盛岡をこんな街にしたいという理想を持っていただき、それを熱くこちらに語っていただけると嬉しいです。

赤坂 やはり若い人たちにいかに街づくりに参加してもらうかだと思っています。行政に対してご意見をいただきましたが、市としても熱い気持ちを持ちながら仕事に取り組んでいきたいと思えます。

坂田 文化芸術は生活の余裕があってこそという会場からの意見もありましたが、その辺についてはいかがですか。

長内 最低限、死なない程度に食べることは必要だと思うが、生活にゆとりがない人は芸術をやっていないかという、最低限食べられるのならそういう欲求の強い人は強いと思えます。

坂田 では最後に、佐々木先生から本日の感想をいただきたいと思えます。

佐々木 創造都市のムーブメントは誰でも起こせる。金沢でも創造都市の会議をとりあえず毎年10年やってみようと思った。まず10年はやってください。それで輪がどんどん広がるので、そこに市長を呼んでくればいい。そして、その思いをぶつけていく。横浜市はランドリー氏と乗り込んで、これは絶対うまくいくからやってくださいと言ったら、その年の4月に創造都市推進課が置かれ、私の友人が課長になった。今はもっと成熟した形になっている。高松市はもっと徹底して創造都市推進局を作った。創造都市推進会議、推進条例まで作った。40歳以下の人でプロジェクトのアイデアを持っている人が集まり、実験的プロジェクトを始めると提案し、それに市が予算をつけた。市役所の中で創造都市推進局が一番面白い局になる。やり方はそれぞれですから、ここに集まっている人たちで盛岡創造都市市民会議と名乗って連続的にフォーラムをやり、そこでこんな条例を作ろうなどと提案していけば、きっとあつと驚かせることができると思えます。よろしくお願ひします。

坂田 実はこの会は先生が言われる前に文化創造都市市民会議を自発的に立ち上げて行った会なのでぜひ継続していきたいと思えます(笑)。今日、いろいろな意見をいただきました。こういう皆さんの意見を参考にしながら続けていきたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。